

農薬登録制度に関する懇談会（第6回）議事概要

日時：平成21年1月22日（木）14:00～16:15

場所：経済産業省別館第1028号会議室

【議事次第】

- 1 開 会
- 2 議 題
 - (1) 作物残留性試験の例数の取扱いについて
 - (2) その他
- 3 閉 会

【議事概要】

- 1 作物残留性試験の例数の取扱いについて（資料1、2）

【主な意見】

- ① 作物残留性試験の例数増と作物グループ化に伴う低減効果に係るシミュレーションについて
 - ・ 事務局案には個別の検討課題もあると思うが、国際的な動向と国内の事情を見据えており、支持する。
 - ・ 事務局は適用作物の多い剤でシミュレーションを行い、これをもって全体の試験数が、36%低減すると結論づけているが、稲専用防除農薬など適用作物の少ない剤もあることから過大評価ではないか。
 - ・ 作物残留試験の例数について合意が見られていない野菜や果樹などについては、現場からの農薬登録の要望も高く、防除の問題も多い。これらの作物に関する試験例数の取扱いや解決策に関して議論を重点化すべき。
 - ・ 事務局の登録申請時に提出された試験数（平成13年～17年）に基づいた試算と、日植防における実際の試験実施状況（平成18年～20年）に基づいた試算にはかなりの乖離がある。実施した試験結果の全てが登録時に提出されるわけではないので、登録時に提出された試験数をもとにしたのでは過小評価になる。メーカーの最新の残留試験委託の実態を考えた場合、日植防の資料をもとに再検証すべきである（メンバーから、再検証の資料が提出され説明）。
 - ・ 短期暴露評価を行うには作物残留性試験の例数の増加が必要となるので、全体としてゆとりをもった試験数にしないと実行性が上がらないのではないか。
 - ・ 作物残留試験のGLP化により、圃場の試験実施効率はかなり下がる可能

性がある。

- ・ 予算、組織の観点から、都道府県が単独で作残 GLP を導入するのは困難ではないか。
- ・ 剤型間の読替及び±25%ルールによる読替の拡大を図るが、これらの読替による試験例数の削減の効果は大きくないと思われる。

② 今後の対処

- ・ シミュレーションの前提としている作物群の検討を促進するが、これがきちんと進まないなど実行上問題が生じた場合には、テストガイドラインを策定した2年後に再度議論が必要。
- ・ できるだけ早い段階で具体的な作物群を示してほしい。
- ・ 懇談会では大筋を決めているだけであり、実際の制度設計には細かい運用面を考える必要がある。実務的な部分についてもよく検討してほしい。

【結論】

- ・ 今回提案された事務局案の作物残留性試験例数及びテストガイドラインを策定して2年が経過した段階で、進捗状況の確認や問題解決策の検討を行うため、再度議題とすることで合意。
- ・ 作物残留性試験の例数は、事務局がテストガイドライン案を策定し、パブリックコメントを行った上で、通知を改正する。
- ・ 例数増を実行可能とする前提条件である作物群の導入など、軽減策についても早急に取り組みを進める。

2 その他（資料1）

特に意見なし。

【結論】

- ・ 既登録剤の取り扱いについて、全ての剤に新たな例数を適用するか等については、5年後見直しの検討項目に関する議論の中で行っていくことに合意。
- ・ 短期暴露評価を行う際の作物残留性試験の例数の変更は、試験例数をさらに増加する必要があるという点について共通理解を得たことを明記するに留め、今後、リスク評価機関も含めて議論を行うこととし、具体的な例数については、評価方法の策定と合わせて今後検討していくことで合意。

3 今後の予定

- ・ 3月を目途に第7回の懇談会を行い、既登録農薬の取扱い、5年後見直しについて議論を行う。